

第4節 周辺の歴史環境と野火止用水の終焉について

(1) 大塚千手堂について

ここでは、5・6Mを野火止用水跡と判断して、第33図と第1・2図を参照し、周辺の状況を見てみることにする。そうすると、本地点はその北側に隣接する「大塚千手堂」(註3)の参道の西側に位置していることがわかる。そのため、今回検出された2基の火葬墓(21・22D)、そして5Mから出土した図版15-99の擂鉢の破片が16世紀代の時期であることから、大塚千手堂関連の遺構・遺物として把握できる可能性がある。

大塚千手堂に関する遺構については、第1地点から検出されている(佐々木・尾形 1986)。この調査では、段切状遺構の基礎面から多くの土坑・溝跡・ピット群が検出され、4号土坑からの六文銭の出土や地下式壙の形態をもつ6号土坑が検出されるなど、墓域的な様相を示すものであった。

その他、平成12年度の中道遺跡第53地点から確認された段切状遺構と思われる遺構、平成16年度の中道遺跡第61・62地点から確認された地表下90cm程という深い位置からの広い範囲での硬化面についても実際に大塚千手堂関連の遺構の可能性があるとして文化庁に報告し、盛土保存が適用されている。

それでは大塚千手堂関連の広がりを把握するために、その関連遺構の分布状況を見てみると、東西方向では第1地点のA～Gグリッドの西側から中道遺跡第53・61・62地点までの約100mが範囲として捉えられる。南北方向では北側がやや不明であるが、仮に南北方向も東西方向と同値とした場合、10,000m²(1ha)もの広大な敷地をもつ寺院であることが理解できる。

これについては、資料1を参照してもらいたい。この資料は、『館村旧記』(註4)から抜粋した「大

大塚千手堂之事

(中略) 抑此千手堂は昔は松林山觀音寺大受院とて天台宗にして古は七堂大伽藍なりといへり。寺中に宿坊式ケ寺杉本坊・松本坊といへり。又宮戸境の谷通りに寺家五ヶ寺あり、故に其所の字を尔レ今呼で寺家谷と云也。千手堂の大門は稻荷山迄三町程也。昔此堂の造作は宮殿樓閣・金銀の鉢を以て耀し、觀音の尊像は光明赫奕として錦襷の戸帳を掛錦の絆を引せ仏具・花皿・花鬘・瓔珞・幡・天蓋を掛ならべ、或は客殿・庫裏・鐘樓其外門の冠木は竜虎梅竹を瑪瑙・珊瑚等の珠玉を以て鏤たれば妝も極楽淨土かと疑ふ、斯尊靈場なりしども、元弘・建武の比(後太平記)天下兵乱の時分焼失して退転せりとなり。又其後日蓮宗より寺に取立大乘院と号ス。抑此法花宗は天台宗より日蓮上人出て一宗をひろむる也。

(中略) 然るに此寺永禄四年当初柏之城没落の刻焼払われて以来堂ハ雖レ無レ之昔の旧跡を呼て尔レ今千手堂とハ云也。

『館村旧記』より

*一町は六十間、約一〇九耕なので、三町は約三三七畝。
*元弘は一三三一～一三三年、建武は一三三四～一三三六年。
*永禄四年は一五六一年。

資料1 『館村旧記』の抜粋資料

塚千手堂之事」の記事の一文がある。これによると、大塚千手堂は、「松林山觀音寺大受院」と称し、「天台宗」に属し、「七堂大伽藍」をもち、「極樂淨土かと疑ふ、斯尊靈場」であることが記述されている。つまり当時は、七堂大伽藍をもつ程の敷地の広さ、そして視覚的にも金銀や錦、瑪瑙・珊瑚等の珠玉などが目に留まるような絢爛さ、さらに最高の賞賛とも言える「極樂淨土」かと疑うほどの尊厳のある靈場であったというのである。

このことから、前述したように新邸遺跡や隣接する中道遺跡での過去の調査内容を照合すると、どうやら『館村旧記』にある大塚千手堂の記事については、信憑性があるものと評価できる段階に来ているのではないかと考えたい。第33図をもう一度見てみると、この大塚千手堂の東に「觀音前」という小名が残っているが、この地区はおそらく「松林山觀音寺大受院」の手前を意味するものであろうことから、やはり広大な敷地をもつ寺院があった可能性は十分考えられる。

この「松林山觀音寺大受院」は、二度の火災に遭遇しており、一度目は元弘・建武の頃（1331～1336年）に焼失し、その後日蓮宗に取り立てられ大乗院と称す日蓮宗の寺院になり、二度目は永禄4（1561）年の柏城没落の際に焼失し、その後は寺の一部である千手堂のみが再建されたという内容である。

（2）野火止用水の終焉について

今回検出された5・6Mから出土した遺物についてであるが、5Mからは陶磁器を中心に遺物が多く出土したが、6Mからは遺物が出土しなかった。ここでは、5Mから出土した遺物を検討することで、本地点で検出された野火止用水の機能停止の時期について考えることにしたい。

『志木市史』（志木市 1990）によると、野火止用水は、承応4（1655）年に開削工事が実施され、「野火止新田への生活用水供給を目的に、時の川越城主松平信綱の家臣安松金右衛門を普請奉行として工事が行われ、わずか40日で竣工した」と説明されている。その後、志木市では「昭和40年（1965）までは、市場通りの中央を用水が通り、銀杏並木があった」と説明され、昭和に入ってからもこの用水は庶民の生活に密接な関わりがあったと理解できるであろう。

そこで、本地点の周辺を見てみると、本地点の南側、第33図で「大門」とある位置には東武東上線が通っており、「稻荷道」を切断していることがわかる。つまり、今回の野火止用水跡の機能が停止した時期については、真っ先にこの東武東上線の開通が関係していると考えるのが自然であろう。

東武東上線は、その前身を東上鉄道と呼ばれていた。東上鉄道が開通したのは、池袋駅～田面沢駅間（現在の川越市駅～霞ヶ関駅間の中程に位置）で、大正3（1914）年5月1日である（朝霞市博物館2003）。

おそらく、大正3年の東上鉄道の開通をもって、この野火止用水は機能を失ったものではないだろうか。そこで、5Mから出土した遺物の時期が東上鉄道の開通の時期に照合できるか検討したいと思う。

今回、朝霞市教育委員会の野沢 均氏に資料鑑定を依頼したところ、まず言えることは、陶磁器・土器の年代について19世紀後半以降の資料が多く、特に器種としては湯飲茶碗や飯茶碗を主体に日常品であり、宗教関連の資料は極めて少ないということであった。そのため、今回検出された5M・6Mは、生活用水を目的として機能した野火止用水跡の可能性が高いという結論であった。

以上、今回5Mから出土した陶磁器・土器は、19世紀後半以降という時期設定で20世紀前半以前であるという設定を条件とするならば、今回の野火止用水が機能を停止した要因は、東上鉄道の開通ということができるであろう。東上鉄道は、後に東武東上線として名称を変え現在に至っているが、こうした

近代化の波が志木市の近世を発展させた舟運の衰退の要因にもなり、庶民の生活様式をも大きく変化させたものであろう。東上鉄道の開通後は野火止用水は機能を失い、空堀になった用水跡は解体され埋め戻されることになったが、その際に近隣の人達あるいは普請を行った者達によって、不用になった食器類が捨てられたのではないかと推測される。

そして新たな生活様式は、それに合った生活用品を誕生させ、生活に深く浸透し、歴史そのものの画期として象徴されるのである。

[註]

- (1) 低地で検出される「周溝をもつ建物跡」では、建物跡にどうして周溝を伴うかが重要な問題であろう。これについては、以前、志木市で『水害と志木』(志木市教育委員会 1988) をテーマに「水塚」の文化財調査を実施したが、その中で、「屋敷の外側に、洪水の際の水流が宅地に激突する勢いを緩和させるための構え堀を設けている」(47頁) という「構え堀」の機能に関係するものではないかとイメージがつながる。
- (2) 『郷土の地名』は、志木市の地名に関するすべてが詳細に調査されており、その中で野火止用水の流路が示されている。柏町地区については、37頁参照。
- (3) 『志木市の社寺』(志木市教育委員会 1985) によると、本尊は千手觀世音菩薩(木造)で、創建は鎌倉末期から室町中期頃と推定されている。
- (4) 『館村旧記』の著者等については、本報告書の11ページ参照。この資料は、志木市において平成8年3月25日付で市指定文化財に指定されている。種別: 有形文化財、種類: 古文書・書籍・典籍、所在地: 柏町3丁目3番28号、所有者: 宮原詳一。

[引用・参考文献]

- 朝霞市博物館 2003『第12回企画展 朝霞と鉄道』朝霞市博物館
- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター
1994「3・4世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』株式会社 山川出版社
- 飯島義雄 1998「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館
- 井上尚明 2000「考古学から見た古代の神社ーもう一つの律令祭祀ー」『埼玉県立博物館紀要-25』埼玉県立博物館
2001「古代神社遺構の再検討」『研究紀要』第16号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 今井正文 1990『西I遺跡』下日出谷西遺跡群発掘調査会
- 尾形則敏 1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例についてー田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料ー」
『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
- 2005「第4章 調査のまとめ 第2節 148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証」『城山遺跡第42地点』
志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義ー武藏野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一例ー」
『埼玉の考古学II』埼玉考古学会設立50周年記念論文集
- 尾形則敏・深井恵子 2001『埋蔵文化財調査報告書2』志木市の文化財第31集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2004『志木市遺跡群14』志木市の文化財第36集 埼玉県志木市教育委員会
2005『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会調査報告第10集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 及川良彦 1998「関東地方の低地遺跡の再検討ー弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心にー」『青山考古』
第15号 青山考古学会
- 佐々木保俊 1987『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集 志木市遺跡

調査会

- 1991「第3章 新邸遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書』志木市の文化財 第15集 埼玉県志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1986『新邸遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第2集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 志木市 1988『郷土の地名』
- 1990『志木市史 通史編上』
- 志木市教育委員会 1985『志木市の社寺』志木市の文化財第10集 埼玉県志木市教育委員会
- 1988『水害と志木』志木市の文化財第12集 埼玉県志木市教育委員会
- 斯波 治 1989『埼玉県指定史跡「野火止用水」本流 発掘調査報告書』新座市遺跡調査会
- 田中茂良 1993「竈構造に関する一考察」『研究紀要Ⅱ』市原市埋蔵文化財センター
- 福田 聖 1999「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（1）—周溝墓とは何かを探るための試み—」『埼玉考古』第34号 埼玉考古学会